

音声・音韻研究の現状と展望

関光準*

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese phonetics and phonology

This paper is a topic-based overview of research articles on Japanese phonetics, phonology and pronunciation education, which have been published in academic journals in 2015 and 2016 in Korea. Among a total of seventy-three articles, twenty-five focus solely on Japanese, six focus on a comparison between Korean and Japanese, and forty-two focus on pronunciation education for Korean learners. Of those that focus only on Japanese, in addition to articles on the Tokyo dialect, there are eleven articles that discuss a variety of Japanese dialects including the Kagoshima and Nagasaki dialects. Thirty-seven articles are written in Korean and Thirty-six in Japanese. These articles are authored by twenty-nine Korean researchers and six Japanese researchers, which clearly indicates that many Korean researchers write their articles in Japanese. There are only seven articles that are the result of a collaborative research involving two or more researchers.

Field : Phonetics, Phonology

Keywords : Segment, Prosody, Contrastive study, Dialect pronunciation, Pronunciation education

1. はじめに

本稿では、2015年~2016年の2年間にかけて韓国の学術雑誌に掲載された日本語の音声・音韻および音声教育に関する論文をとりあげる¹⁾。筆者の調査によると、この時期に発表された論文は73本である。その内訳は、日本語そのものに関する論文が25本、韓国語と日本語を対照したものが6本、韓国人学習者に対する日本語音声教育をテーマとするものが42本となっている。また、日本語の音声・音韻を扱った論文の中には、東京方言(共通語)のほか、鹿児島方言、長崎方言など、日本語の諸方言に関するものが11本含まれている。論文の作成言語は、韓国語が37本、日本語が36本である。著者は韓国人が29名、日本人が6名となっており、母語の韓国語ではなく日本語で論文を書く韓国人研究者が少なくない。なお、二人以上の共著者によるものは7本と極めて少なかった。以下では、分節音、韻律、対照研究、方言音声、音声教育(中間言語、発音習得、音声教育実践)の順に概観する。

* 建国大学校 教授

1) 韓国研究財団の登載誌・登載候補誌に掲載された論文を対象とするが、その他の学術雑誌の掲載論文も一部含まれている。

2. 分節音

分節音に関する論考では、破裂音の音響特徴、外来語における促音化、オノマトペの音韻特徴などがとりあげられている。

金允英・崔英淑(2015、2016)は、語頭と語中における破裂音とその後続母音について、VOT、閉鎖持続時間、後続母音のピッチと強さを分析し、調音位置による相違について検討している。

外来語における促音化を取り上げた研究に孫範基(2016b)がある。『NTTデータベースシリーズ日本語の語彙特性CD-ROM版』(天野・近藤編 1999)の「単語アクセント」項目から抽出された外来語の単一語(4,229語)を対象に、促音化の起こった外来語のアクセント型と促音化の関連性について、擬似複合構造に基づくアクセントの付与と促音化を分析し、アクセントの付与から重音節化が引き起こされるという見解を示している。

オノマトペの音韻特徴について、孫範基(2015c)は、最適性理論(OT)の枠組みに基づいて、オノマトペに起こる完全反復と強調形モーラの挿入における音韻・形態的な特徴を検討し、反復語の形態構造と強調形モーラ挿入からの変異との関係を説明している。同氏はまた、OTの枠組みから動詞活用におけるラ行音の撥音化を分析し、その形態・音韻的特徴および語彙的特徴を考察している(孫範基 2016e)。

3. 韻律

韻律に関する論考は、アクセントをとりあげたものが多く見られた。鈴木美恵・崔英淑(2016a)は、日本語能力試験出題基準における外来語について、東京方言話者(若年層と中年層)の発音を分析し、アクセントの世代による違いについて調べている。また、『NHKアクセント辞典』と『新明解アクセント辞典』のそれぞれ旧版と新版に収録された外来語アクセントの変化についても調査している(鈴木美恵・崔英淑 2016b)。孫範基(2016c)は、外来語の原語が「語根+接辞」から構成される、いわゆる擬似複合構造を持つ外来語のアクセント型を分析して、アクセント型の付与と関連する接辞を基準にそれぞれの接辞を分類し、多くの接辞に「前部保存型」の特徴が現れていると報告している。金庸珏(2016)は、『NHK日本語発音アクセント辞典』の旧版と新版に提示されている助数詞について、アクセント型に見られる変化の様相を「第一アクセント型の追加、第二アクセント型の追加、第二アクセント型の脱落、アクセント型の順位変更、アクセント型の変形」の5つのタイプに分類した。

東京方言では、2つの文節が係り受け関係にない場合でもdephrasingが生じた発話が観察されることがある。全美柱(2016)は、この現象に注目し、統語境界の有無がdephrasingの生起に及ぼす影響を検討している。統語境界が存在する2文節と存在しない2文節のdephrasingの生起頻度を定量的に分析し、統語境界がない場合にはdephrasingの生起頻度が有意に高くなるが、統語境界がある場合でもdephrasingが生じる発話が観察されるのは、強調ストレスが持つ韻律特徴と関係があると考察している。

4. 対照研究

韓国語と日本語を対照した論考には、アクセントと母音融合に関するものがある。アクセントについては、アクセントが弁別機能を持っている方言としてよく知られている韓国慶尚道地域の諸方言(釜山方言、大邱方言、慶州方言、馬山方言、密陽方言)と東京方言を対照したものと、韓国江原道地域の江陵方言と鹿児島方言を対照したのものがある。孫在賢(2015a)は、大邱方言と東京方言における用言のアクセント体系を対照し、東京方言とは異なり、大邱方言では語頭音節の分節音がアクセントに及ぼす影響が大きいと指摘する。同氏には、大邱方言と東京方言における動詞の使役形と受身形のアクセントを対照したもの(孫在賢 2016a)、同じく多型アクセント方言として知られている密陽方言と東京方言のアクセント体系を論じたもの(孫在賢 2016b)、釜山方言と東京方言の外来語のアクセント体系を対照したもの(孫在賢 2015b)もある。高慧禎(2015b)は、江陵方言と鹿児島方言について、アクセント核の有無による当該音節の持続時間の変化の様相を調べたものである。

母音融合に関する論考としては孫範基(2015e)があげられる。母音融合とは二つの連続する母音が融合し、一つの母音となる現象のことで、つまり母音連続の回避の一つの現象であるが、氏はOTの枠組みからソウル方言と東京方言に見られる母音融合のパターンを分析している。これまでの先行研究では、母音連続の回避方法として、削除・融合・わたり音化と分類されていたが、これを融合として統合的に捉え、その融合母音の詳細を素性レベルの制約相互作用から明らかにし、その素性レベルで現れる様々な母音融合の類型を制約の相互作用によってまとめている。

5. 方言音声

方言音声については李炳勳と孫範基が多数の論文を発表している。鹿児島方言、長崎方言、大分方言などにおけるアクセント体系や母音融合などのような音韻変化を最適性理論(OT)に基づいて考察した論考が大半を占めている。

まず、アクセントについて。李炳勳(2015a, 2016c)は、長崎方言の複合語アクセント規則をOTの枠組みで分析している。長崎方言の複合語は前部要素がアクセントを持つ場合、複合語にアクセントが現れるが、前部要素がアクセントを持っていても3モーラ以上である場合は、複合語にはアクセントが現れないとし、このような現象を、複合語のアクセントが形態素の境界に位置することを要求する複合語アクセント制約をもって説明できると主張している。高慧禎(2015a, 2016a)は、鹿児島方言の二型アクセントの発話における世代差(老年層と若年層)と、アクセント型と長さの関係を音響分析によって考察した。

母音の音韻論について。諸方言の母音融合現象をOTの枠組みから説明する論考に、広島県内の緒方言(孫範基 2016a)、多治見方言(孫範基 2015a)、大分方言と首里方言(孫範基 2016d)、大分方言(李炳勳 2015d)がある。その他、諸鈍方言における音節制約の類型(孫範基 2015d)、那覇方言の前舌母音化(李炳勳 2015b)、鹿児島方言における母音上昇と母音脱落(李炳勳 2016a)、大分方言におけるオ列長音の開合の区別(李炳勳 2015c)に関する論考がある。

子音の音韻論について。李炳勳(2016b)は、沖縄県と那国方言における有声摩擦音の閉鎖音化と無声摩擦音の破擦音化をOTの枠組みから分析している。また、孫範基(2015b)は、沖縄県首里方言における口蓋

化の範囲と阻止について、階層的最適性理論(ST-OT)に基づき、階層別の制約優先順位の違いから、口蓋化の可否を説明している。

6. 音声教育

6.1 中間言語

韓国人学習者の日本語音声の問題点を取り上げた論考の多くは、アクセント、イントネーション、パラ言語情報に関するものであった。それ以外には、特殊拍、外来語の音韻規則の認識、分節音に関するものがあった。

まず、アクセントについて。李敬淑・酒井真弓(2015a)は、日本語の特殊拍を含む無意味語と有意味語のピッチパターンを普通拍語と比較し、その傾向を調べた。李敬淑・酒井真弓(2015b)では、無意味語と有意味語の発話に見られるピッチパターンの類型化を試みている。李範錫(2015)は、2拍語から4拍語の有意味語の発話を分析し、日本語アクセントの発話に母語の影響が認められ、時期を異にした発話では、ピッチ実現の非安定性が見られたと報告した。

イントネーションについては、韓国人学習者の発話における語尾上げ現象の生起要因とテキスト朗読音声のイントネーション、相づち表現と終助詞のイントネーションを調べたものがある。北野孝志(2015、2016)は、韓国人学習者の発話に現れる語尾上げ現象は、発話意図を持った言語行動というよりは、母語の影響を強く受けた現象であるのに対し、日本語話者(北関東方面話者)の尻上がり調は、発話意図をもった意識的な言語行動であると指摘し、適切な指導により中級以上の学習者においても語尾上げ現象の矯正は可能であるとしている。青森剛・崔英淑(2015)は、韓国人学習者と日本語話者の朗読音声におけるイントネーションパターンの違いについて、高慧禎(2016b)は、韓国人学習者と日本語話者による相づち表現(「そうですか」と断定表現(「そうです」)の発話におけるイントネーションパターンの違いについて分析している。その他、韓国人学習者と日本語話者の発話における終助詞「よ」と「ね」のピッチパターンの違いを分析したものがある(金姪衍 2015a、2015b、2016a、2016b)。

パラ言語情報については、感情音声の認識と知覚に関する論考が目につく。丁美貞(2015、2016)は、10種類の感情(怒り・喜び・皮肉・恐れ・悲しい・驚き・媚・穏やか・おかしい・疑い)を込めて発話された刺激語(「バナナ」、「早く」、「すみません」、「そうですか」)に対する韓国人学習者と日本語話者の認識の違いの有無と、感情音声の判断基準になる潜在意識は何かを探っている。小城彰子(2016)は、6つの感情(聞き返し、同情、喜び、疑い、嫌だ、否定)を込めて発話された音声(「カラオケ?」「え(ー)?」)に対する日本語話者と韓国人学習者の認識の違いを分析し、両者の感情認識には相違が見られ、肯定的感情か否定的感情かを判断する際の手がかりとなるF0、持続時間、強弱といった音響的指標が、日本語話者と韓国語話者で異なる可能性があるとして指摘した。

特殊拍については、長音の知覚と促音の挿入に関する論考がある。司空煥(2016)は、韓国人学習者における日本語長音の知覚に学習者の母方言(ソウル方言と慶尚道方言)のアクセントが影響を及ぼすことを聴取実験により分析している。関光準(2015c)は、国立国語研究所のプロジェクト『日本語教育データベースの構築-日本語学習者会話データベース』²⁾を利用して、韓国人学習者の会話音声に見られる促音

2) <https://nknet.ninjal.ac.jp/nknet/ndata/opi/>(最終アクセス日: 2017.2.16)

挿入の実態について、音声環境、学習者の日本語能力との相関性、語彙や文法との関連性などを中心に分析し、促音挿入の生起要因について考察した。

外来語の音韻規則の認識について。桂川智子(2015)は、韓国人学習者が外来語の日本語化規則をどのように構築しているのかを調べ、日本語化規則が学習者全体に定着しているかどうかは、音素によって違いがあると指摘する一方、日本語化規則の導入の有用性と時期について考察している。また、韓国人学習者は未習の外来語に接した場合に、韓・日両言語の音韻の違いからだけではなく、既習の外来語からも日本語化規則を構築していることが確認されたと報告した。李香蘭(2016)は、カタカナ語の書き取りテストの結果を用いて、発音とのずれがどれぐらいあるのか、またずれの原因や発音の知覚率に影響を与えている要因、日本語能力との関わりなどを多角的に分析・検討している。

分節音については、破擦音に関する論考があった。崔英淑(2015)は、日本語破擦音の調音時における舌の位置を表すパラメータとして、摩擦騒音区間におけるCentre of Gravityという尺度を用いて、日本語話者と韓国人学習者の破擦音の発話時における調音位置の違いを音響的観点から分析した。

6.2 発音習得

韓国人学習者の発音習得の実態とそのプロセスについては、まだ未解明の部分が多い。まず、縦断的研究について。陣宗福(2015a, 2015b, 2015c)は、『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』(C-JAS: Corpus of Japanese as a Second Language)³⁾を用いて、韓国人学習者の約3年間における自然会話に現れたザ行音、語頭の有声破裂音、破擦音「つ」について、その発音の誤用の実態と変化の様子、個人差、日本語能力との関係などを検討した。金鼎京(2016)は、第二言語として日本国内で日本語を習得した韓国人帰国児童の談話資料(自由談話と統制談話)を用いて、帰国前後の発音変化を検討し、これまでの研究ではほとんど指摘されることのなかった変化が認められたと報告し、その要因には韓国語の影響と思われるものもあれば、そうでないものもあることを指摘している。

次に、横断的研究について。関光準(2016b, 2016c)は、『日本語学習者会話データベース』(注2)を参照)を用いて、日本語特殊拍の発音(挿入と脱落)と外来語の発音を分析し、特殊拍と外来語の発音の誤用の実態、習得難易度、習得における個人差、発音習得に及ぼす影響について定量的に検討している。

6.3 音声教育実践

韓国人学習者に対する音声教育に関する論考には、音声教育実践、学習者と教師にかかわる社会心理学的な要因、韓国人学習者の発音に対する評価、教材分析などに関するものが見られる。まず、音声教育実践について。李賢珍(2015)は、「教室内の音声指導」とICT(Evernote⁴⁾)を利用した「教室外学習」(オンライン)という教室内外における学習環境を整備して、韓国人学習者を対象に行われた実践授業について報告している。報告によると、学習者は「教室外学習」において、メタ認知ストラテジーを中心とする多様な発音学習ストラテジーを使用しており、自らの学習を振り返ったり、自分の音声を内省するなど、自

3) <https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/laj/>(最終アクセス日: 2017.2.16)

4) アメリカのEvernote社によって提供されるアプリケーション及びウェブを用いたクラウドサービス。パソコンやスマートフォン、iPad他のモバイル端末など、ほとんどのデバイスに対応しており、「テキスト、写真、音声ノートの作成」「Webページのクリップ」「様々なデバイス間での同期」「写真や画像に含まれる文字の検索」「これらを用いた会議、プレゼンテーション」などを簡便に行うことができる。
<https://evernote.com/intl/ko/>(最終アクセス日: 2017.2.16)

律学習を実現していたということである。また、自分の日本語発音における問題点がわかり、日本語の発音が改善された、日本語の発音に注意を向けるようになった、などの理由からEvernoteを活用した発音学習(自分の発音の録音、自己内省ノート作成、教師のフィードバック)を肯定的に評価していたと述べている。金榮蘭(2015)は、韓国人学習者の日本語学習に関する意識調査の結果に基づいて、韓国人学習者にとってその習得と運用が難しいと思われる発音項目を抜き出し、VT法(Verbo-Tonal Method)を用いた音声教育方法を紹介している。姜蓮華(2016)は、清音と濁音の知覚についてVT法のわらべ歌リズムを用いた指導の有効性について考察した。

発音指導実践における教師の学びについては、千仙永(2016)が、発音指導実践を行っている大学院の教育実習における実習生の学びを分析している。教師経験を持つ一人の実習生が、発音指導実践において学習者とのインタラクションを通して、学習者の発音学習における言動や学習姿勢を観察することで得た学びを、①学習者の発音学習の熱心さや達成感に関する学び、②学習者の柔軟な発音学習姿勢に関する学び、③発音学習における学習者の自己修正能力に関する学び、④学習者が抱える発音不安に関する学び、の4つにまとめている。

学習者の日本語発音学習に影響を与える社会心理学的な要因について、李琬兒(2016a)は、韓国人と日本人の日本語教師を対象に、発音指導に関するピループを調査し、そのピループにどのような要素が影響を与えているかを分析した。その結果、両教師とも確固たるピループを持っており、そのピループには教師の専攻と授業内容、学習者などが影響を与えていると指摘した。李琬兒(2016b)は、師範大学の日本語教育学科と人文大学の日本語科の学生を対象に日本語教師の発音指導に対するピループを調査し、大学の専門とカリキュラム、発音指導科目の受講有無、発音指導を行う教師、さらに日本語の発音に対する意識と日本留学経験の要素が影響を与えていることを明らかにしている。川染有(2016)は、日々の実践において行われている教師の発音指導活動と発音指導活動の有無に関わる要因を分析し、①発音・発音指導に対する考え方、②発音指導の知見、③現場の方針・事情、④外国語学習の経験の4つのカテゴリーに分類される17の要因が発音指導活動の促進または抑制・回避に影響を与えていると指摘している。崔英淑(2016)は、韓国人学習者の日本語授業場面における発音不安を調査し、発音不安の要因は教室環境(JFLとJSL)、発音学習スキルの欠如、性別、発音に関する関心、自分の発音に対する自己評価、日常における日本語の発話量によって影響されるとしている。

韓国人学習者の日本語発音に対する評価と学習ストラテジーについて、全娵姝(2015)は、韓国人学習者の日本語イントネーションがプレゼンテーションの評価観点に与える影響について分析している。韓国人学習者は、同じ韓国人学習者のイントネーションを評価する際に、日本語の正確さおよび流暢さ、非言語およびパラ言語能力に関する評価項目に影響を与えるが、日本語教師が韓国人学習者のイントネーションを評価する際には、日本語の正確さや流暢さ、プレゼンテーション向きの話し方以外にも社会的望ましさや会話ストラテジーの評価にも影響を与えると指摘している。全鍾美(2015)は、韓国人学習者の日本語発話(独話とディスカッション)に対する日本語話者と韓国語話者の評価結果を分析し、発話タスクのタイプ、評価者の母語などによって評価に与える影響が異なると述べている。李有振(2015)は、韓国人学習者の日本語朗読音声における発話速度とポーズが日本語話者による印象評価に与える影響について分析し、発話速度とポーズは、韓国人学習者の日本語発話の流暢性と自然性の判断に重要な影響を与える要因となっていると指摘した。金姪衍(2016c)は、初級学習者の朗読音声に現れたポーズの位置と頻度を日本語話者のそれに合わせることによって、流暢性が改善されたとし、ポーズ指導の有効性と必要性を主張した。金姪衍(2015c)は、学習者の発音学習ストラテジーとイントネーション学習(終

助詞「よ」)の関係を分析し、アクセント学習ストラテジーがイントネーション学習に有意義な影響を与えると報告している。

日本語教材における発音の取り扱いについて。趙大夏(2015)は、高校の日本語教科書における発音項目の導入の実態とその内容の妥当性などを分析し、学習初期段階における発音指導の必要性和韓国人が間違えやすい発音の導入と指導、日本語運用能力の向上のためには、アクセントとイントネーションの導入と指導の必要性があると強調している。

7. おわりに

韓国における日本語の音声・音韻および音声教育に関する研究は、着実に成果を挙げてきているものの、分野による偏り、研究者層の薄さ、研究とその成果の教育への応用のための土台の脆弱さなど、解決すべき課題が山積している。韓国語との対照研究、韓国人学習者の発音習得プロセスの解明、それに基づいた音声教育シラバスの開発と教材の作成など、今後の研究に期待したい(高秀晩 2016、閔光準 2015a, 2015b, 2016a)。

最後に、本稿では2015年から2016年にかけて韓国の学術雑誌に掲載された日本語の音声・音韻および音声教育に関する論文はすべてとりあげたつもりであるが、抜けている文献がある可能性もある。また、論文に関する記述内容に誤解があることも否めない点については、ご容赦を願いたい。

【参考文献】

- 姜蓮華(2016)「일본어 청·탁음(淸·濁音) 지각(知覺)에 있어서의 오용경향과 지도법에 대하여」『日本文化学報』70 韓国日本文化学会 pp.75-95
- 高秀晩(2016)「일본어 음운론 연구의 현황과 과제」『日語日文学研究』98 韓国日語日文学会 pp.3-17
- 高慧禎(2015a)「日本語鹿児島方言のアクセント変化に関する一考察—老年層と若年層の比較による—」『比較日本学』34 漢陽大学校日本学国際比較研究所 pp.369-386
- _____ (2015b)「한국어 강릉방언과 일본어 가고시마방언의 지속시간에 관한 일고찰」『日本学研究』46 檀国大学校日本研究所 pp.599-619
- _____ (2016a)「鹿児島方言の時間長に関する音響的特徴について」『日本語学研究』50 韓国日本語学会 pp.37-54
- _____ (2016b)「초급학습자의 일본어 인토네이션의 특징에 관한 일고찰—피치곡선을 통한 분석—」『日本語教育』77 韓国日本語教育学会 pp.27-38
- 金榮蘭(2015)「일본어학습자를 위한 일본어 발음의 실전 지도—VT법을 중심으로—」『日本近大学研究』48 韓国日本近代学会 pp.7-33
- 金庸珪(2016)「『NHK日本語発音アクセント新辞典』을 통해 본 일본어 조수사 악센트의 변화」『比較日本学』38 漢陽大学校日本学国際比較研究所 pp.235-248
- 金允英·崔英淑(2015)「조음위치에 따른 일본어 피열음의 음향음성학적 특징 분석」『比較日本学』34 漢陽大学校日本学国際比較研究所 pp.387-399

- _____ (2016) 「음성환경에 따른 일본어 파열음에 대한 음향음성학적 분석」 『日本学研究』 48 壇国大学
校日本研究所 pp.325-342
- 金姪衍(2015a) 「文末助詞 ‘よ’의 音聲的인 特徵에 관한 考察」 『日語日文学』 68 大韓日語日文学会 pp.43-54
- _____ (2015b) 「文末助詞‘よ’의 発話意図에 따른 音響音声学的的特性에 관한 考察」 『日本近大学研究』 49 韓国
日本近代学会 pp.41-59
- _____ (2015c) 「韓國人 日本語 學習者の 文末 助詞 ‘よ’의 인트네이션 學習에 관한 考察」 『日本語文学』 71
韓国日本語文学会 pp.95-116
- _____ (2016a) 「문말조사 ‘ね’의 음향음성학적 특성에 관한 고찰」 『日本近大学研究』 51 韓国日本近代学会
pp.91-109
- _____ (2016b) 「表現意図를 나타내는 韓國人日本語學習者の 終助詞 ‘ね’에 관한 音響音声学的인 特徵」 『日本
語文学』 72 日本語文学会 pp.119-138
- _____ (2016c) 「韓國人 日本語 初級學習者에 대한 포즈 指導의 有效性—음향음성학적인 特長을 중심으로—」
『日語日文学』 69 大韓日語日文学会 pp.159-175
- 金昴京(2016) 「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅—音韻・音声の変化に注目して」 『日本近大
大学研究』 42 韓国日本近代学会 pp.7-26
- 閔光準(2015a) 「일본어 음성교육의 실천과 교사의 역할」 『日本語教育研究』 31 韓国日語教育学会 pp.63-79
- _____ (2015b) 「한국인학습자의 일본어 음성습득 연구의 과제—한국형 일본어 음성교육 실러버스와 커리큘럼 개발
을 위하여—」 『日本語学研究』 45 韓国日本語学会 pp.3-18
- _____ (2015c) 「한국인학습자의 일본어 회화음성에 보이는 촉음 삼입 현상」 『日本語文学』 64 韓国日本語文学会
pp.99-118
- _____ (2016a) 「일본어 음성연구의 현황과 과제—연구와 교육의 상호 연계 및 연구 성과의 공유를 위하
여—」 『日語日文学研究』 98 韓国日語日文学会 pp.18-39
- _____ (2016b) 「한국인학습자의 일본어 외래어 발음습득 횡단 분석」 『日本語教育』 77 韓国日本語教育学
会 pp.65-86
- _____ (2016c) 「한국인학습자의 일본어 특수박의 발음습득에 대한 횡단 연구—ACTFL-OPI 방식의 회화음성
을 대상으로—」 『日本語教育』 75 韓国日本語教育学会 pp.15-32
- 司空煥(2016) 「韓國人學習者による日本語母音の長短の知覚における母方言のアクセント特性の影響につい
て—ソウル方言話者と慶尚道方言話者の比較—」 『日本語教育』 76 韓国日本語教育学会
pp.47-59
- 孫範基(2015a) 「多治見方言の母音融合について—最適性理論に基づくミクロ的言語類型論—」 『日本学研
究』 45 壇国大学校日本研究所 pp.215-238
- _____ (2015b) 「슈리방언에 나타나는 구개음화의 양상—구개음화의 적용과 저지에 대해서—」 『日本近大学
研究』 66 韓国日本近代学会 pp.245-267
- _____ (2015c) 「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴について—完全反復と強調形モーラの挿入—」 『日本言
語文化』 31 韓国日本言語文化学会 pp.111-133
- _____ (2015d) 「日本語の音節制約の類型について—諸鈍方言の例から—」 『日語日文学研究』 95 韓国日語日
文学会 pp.157-179
- _____ (2015e) 「韓國語と日本語の母音連続の回避の類型について—ソウル方言と東京方言の母音融合—」
『日本近大学研究』 64 韓国日本近代学会 pp.311-334
- _____ (2016a) 「日本語方言に現れる母音融合の類型—広島県の方言の例から—」 『日本言語文化』 34 韓国日
本言語文化学会 pp.149-174

- _____ (2016b) 「日本語外来語に起こる促音化について一韻律制約による音韻的拡張の観点から一」 『日本語文化』 36 韓国日本語文化学会 pp.35-60
- _____ (2016c) 「日本語外来語のアクセント構造について一擬似複合構造に基づく分析一」 『日本近大学研究』 42 韓国日本近代学会 pp.85-103
- _____ (2016d) 「일본어의 두 방언에 나타나는 모음축약의 양상—중모음의 분포 및 교체에 관하여—」 『日本研究』 69 韓国外國語大學校日本研究所 pp.151-179
- _____ (2016e) 「現代日本語における縮約形の形態・音韻的特徴—動詞活用におけるラ行音の撥音化について—」 『日本学研究』 49 壇國大學校日本研究所 pp.363-385
- 孫在賢(2015a) 「韓國語と日本語の用言のアクセント—大邱方言と東京方言の対照を中心に—」 『比較日本語』 35 漢陽大學校日本學國際比較研究所 pp.249-260
- _____ (2015b) 「韓國語釜山方言と日本語東京方言の外来語のアクセント」 『日本語教育研究』 31 韓國日語教育學會 pp.101-113
- _____ (2016a) 「韓・日言語の使役形・受身形のアクセント」 『日本語学研究』 47 韓国日本語學會 pp.23-34
- _____ (2016b) 「韓國語と日本語のアクセントの対照研究—東京方言と密陽方言を例に—」 『日本語文学』 75 日本語文學會 pp.33-48
- 李敬淑·酒井真弓(2015a) 「韓國人日本語學習者の特殊拍語生成に現れるピッチパターン」 『日語日文学』 65 大韓日語日文學會 pp.147-162
- _____ (2015b) 「韓國人學習者の日本語発話に現れるピッチパターンの再考」 『日本学報』 103 韓国日本學會 pp.75-86
- 李範錫(2015) 「韓國人學習者における日本語アクセントの実相—母語の影響の観点から—」 『日本語学研究』 46 韓国日本語學會 pp.75-95
- 李炳勳(2015a) 「나가사키방언의 단어악센트와 율격구조」 『日本語文学』 67 韓国日本語文學會 pp.123-144
- _____ (2015b) 「나하방언의 전설모음화—최적성이론에 의한 분석—」 『日本文化研究』 53 東アジア日本學會 pp.235-252
- _____ (2015c) 「오이타방언에 있어 오(オ)단 장모음 개합(開合)의 구별—최적성이론에 의한 분석—」 『日本語教育』 70 韓国日本語教育學會 pp.143-156
- _____ (2015d) 「오이타방언의 모음융합」 『日本語文学』 65 韓国日本語文學會 pp.121-143
- _____ (2016a) 「가고시마 방언의 모음상승과 모음 탈락」 『日本文化研究』 60 東アジア日本學會 pp.209-227
- _____ (2016b) 「요나구니방언의 폐쇄음화와 파찰음화」 『日本近大学研究』 40 韓国日本近代學會 pp.117-136
- _____ (2016c) 「최적성이론에 의한 나가사키방언 복합어 악센트의 분석」 『日本文化研究』 59 東アジア日本學會 pp.205-222
- 李有振(2015) 「발화속도와 포즈가 청취인상에 미치는 영향—한국인학습자의 일본어 낭독음성을 중심으로—」 『日本語文学』 67 韓国日本語文學會 pp.195-211
- 李琬兒(2016a) 「日本語教師にとって発音指導とは何か—ピリーフを中心に—」 『日本学』 42 東國大學校日本學研究所 pp.95-118
- _____ (2016b) 「韓國人日本語學習者の発音および発音指導に対するピリーフ」 『日語日文学』 70 大韓日語日文學會 pp.119-137
- 李香蘭(2016) 「日本語學習者のカタカナ語の発音知覚率」 『日本文化学報』 68 韓国日本文化學會 pp.237-255
- 李賢珍(2015) 「ICT를 활용한 일본어 음성교육 실천연구—Evernote와 교실 내 학습—」 『日本言語文化』 33 韓国日本語文化學會 pp.229-253

- 全美柱(2016)「東京方言の統語境界におけるdephrasing生起の分析」『日語日文学研究』 96 韓国日語日文学会 pp.173-188
- 全娟姝(2015)「韓国日本語学習者の日本語発音がプレゼンテーションの評価観点に与える影響とは—イントネーション要因に焦点をあてて—」『日本言語文化』 32 韓国日本言語文化学会 pp.129-152
- 全鍾美(2015)「日本語非母語話者による日本語学習者の口頭能力の評価—音声項目の分析を中心に—」『日本語教育』 73 韓国日本語教育学会 pp.31-46
- 丁美貞(2015)「日本語のパラ言語的情報からみた認識差—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の対照分析—」『日本言語文化』 31 韓国日本言語文化学会 pp.135-151
- _____ (2016)「日本語の感情表現におけるパラ言語的情報の音声特徴に関する質的分析」『日本言語文化』 36 韓国日本言語文化学会 pp.79-96
- 趙大夏(2015)「일본어 I 교과서의 음성교육에 대한 고찰」『日本語文学』 68 日本語文学会 pp.241-256
- 陣宗福(2015a)「자발 음성을 통해 본 한국인학습자의 일본어 파찰음 「ㄷ」의 습득」『教師と教育』 35 建国大学校教育研究所 pp.1-20
- _____ (2015b)「한국인학습자의 일본어 ㄹ행음 습득에 관한 종단적 분석」『日本語教育』 71 韓国日本語教育学会 pp.17-30
- _____ (2015c)「한국인학습자의 일본어 어두유성파열음 습득」『日本語教育研究』 32 韓国日語教育学会 pp.211-226
- 千仙永(2016)「発音指導実践における実習生と学習者のインタラクション—実習生の学びを中心に—」『日本語学研究』 48 韓国日本語学会 pp.125-142
- 崔英淑(2015)「한국인 일본어학습자의 일본어 파찰음의 음향음성학적 특징 분석」『東亜人文学』 32 東亜人文学会 pp.125-139
- _____ (2016)「한국인 일본어학습자의 일본어 발음 불안요인에 관한 연구」『日本語教育』 77 韓国日本語教育学会 pp.145-160
- 青森剛・崔英淑(2015)「韓国人日本語学習者によるテキスト朗読音声のイントネーションに関する研究」『日本語文学』 67 韓国日本語文学会 pp.169-193
- 桂川智子(2015)「韓国人学習者における日本語外来語の音韻規則の認識傾向」『日語日文学研究』 95 韓国日語日文学会 pp.3-23
- 川染有(2016)「日本語教師の発音指導活動に関わる要因—教師インタビューの質的分析から—」『日本語教育』 77 韓国日本語教育学会 pp.11-26
- 北野孝志(2015)「韓国人日本語学習者の語尾上げ現象に関する考察—北関東方言との相似と相違を中心に—」『日語日文学研究』 94 韓国日語日文学会 pp.291-312
- _____ (2016)「韓国人学習者の語尾上げ現象の評価基準に関する考察」『日語日文学研究』 97 韓国日語日文学会 pp.3-19
- 小城彰子(2016)「感情を表した日本語音声の知覚判断—韓国語を母語とする日本語学習者を対象として—」『日本語教育研究』 35 韓国日語教育学会 pp.43-57
- 鈴木美恵・崔英淑(2016a)「東京出身の世代別外来語のアクセントの比較分析—JLPT語彙を中心に—」『日本文化学報』 70 韓国日本文化学会 pp.97-117
- _____ (2016b)「日本語における外来語のアクセントの分析—JLPT語彙の外来語を中心に—」『日本語文学』 73 日本語文学会 pp.69-94

〈 요 지 〉

음성·음운 연구의 현황과 전망

본고는 2015년~2016년에 국내 학술잡지에 게재된 일본어 음성·음운과 음성교육에 관한 문헌을 주제별로 개관한 것이다. 이 시기에 발표된 논문은 총 73편으로, 일본어에 관한 것이 25편, 한국어와 일본어를 대조한 것이 6편, 한국인학습자를 대상으로 한 음성교육에 관한 것이 42편이다. 일본어에 관한 논문 중에는 도쿄방언 뿐만 아니라 가고시마방언, 나가사키방언 등 일본어의 여러 방언을 주제로 한 논문 11편이 포함되어 있다. 논문의 작성 언어는 각각 한국어 37편, 일본어 36편이고, 논문 저자는 한국인 29명, 일본인 6명으로, 일본어로 논문을 작성하는 한국인 연구자가 적지 않음을 알 수 있다. 한편, 2명 이상의 공동 연구로 이루어진 논문은 7편뿐이었다.

논문분야 : 음성학, 음운론

키워드 : 분절음, 운율, 대조연구, 방언음성, 음성교육

■ **민광준 (閔光準)**

건국대학교 교수

mingj@konkuk.ac.kr